## ささぐ 1) 紀行 その六十四

## 篠栗街道物語(後編)

村の 黒田長政の命令によって 麓に点在していた家々を、 個所に集め、 筑前国続風土記の篠栗 欄には、 篠栗宿 「南側の山 出宿とも は と書かれています。これ 前回触れたように町 いう)とした」

江戸時代の前半にはすで 立てを行ったことを指し、 す。 とが分かりま 村が成立したこ に宿場町として

にあった) あった際に宿 茶屋」(現在の 主の別館があ 「本陣」として 泊や接待する や重要な来客が びました。藩主 篠栗小学校東側 これを「御 と呼

篠栗宿全図

ており、 3 3 0 明治時代以降になってか らのことです。 にまで家並みが続くのは てられることが規制され 場以外の道筋に家屋が建 代の篠栗村では、この宿 うになりました。 と下町に区分けされるよ の宿場町が完成し、 この御茶屋を中心に東西 現篠栗駅前付近 (約600m) 江戸時 上町

設の 現存しています。 設の「問屋場」跡だけが時の建物として、唯一公 を参考)ようですが、 しくは『篠栗町誌民俗編』 る店も数多くあった(詳 篠栗宿でも、 商売をす 当

篠栗宿には藩

ています。これは、 面した側が狭く、奥に長宿場町は一般に道路に い構造の家屋が建てられ

の役割も果たした場所で、 税金)を掛ける際にが「運上銀」(商売店 の宿場町によくある光景 税したために、 路側の間口幅に対して課 みるとよいでしょう。 です。ほかの宿場町を訪 れた際にも注意深く見て さて、このような篠 「運上銀」(商売店への

日本全国

に

道

記述もなされている貴重 点しかありません。とく 所図会』と町内在住の平 宿場の様子を伝える絵図 しておきましょう。 り知られていない重要な ながら、これまではあま 作者・作図年代とも不明 に平井家に伝わる絵図は、 井家に伝承する絵図の二 村玉蘭の描いた『筑前名 は意外にも少なく、 図から分かることを紹介 なものです。これらの絵 しの知るところでは、 わた 奥

各藩

とです。そのほか、主だっ どを張り出す掲示板のこ きな石製と見られる「常見張る目的のためか、大 た神社仏閣名、店の名前 も建てられていました。 では「金出川酒屋」1軒 入口には、「御制札所」先に述べた御茶屋屋敷 や「決まりごと」な が門外に設置され 藩の「御触 す。 あってほしいと思います。 発展を続ける篠栗宿で れますが、そのほとんど 宿駅の風情を残しながら、 が現存しないのは残念で はたくさんの施設が見ら 治時代初期には3個所)。 子も記されています このように絵図の中で しかし、 これからも [おわり] 明

なお、 参考文献 ます。 理全誌16]/「篠栗町誌民俗編 配意をいただきました。紙面 に際し、 ※文中の敬称は略しています。 宿場町」海鳥社/ をお借りしてお礼を申し上げ |筑前国続風土記| 絵図の実見や本編起稿 平井嘉樹ご夫妻のご 「福岡縣地 街道と

篠栗古文書会員

が設けられていた様

絵図の中では、

篠栗町文化財専門委員・

篠栗宿でも完備

## 【歴史民俗資料室より追記】

現在は九州歴史資料館所蔵の 新たに情報提供をいただき 御茶屋図なども資料として確認しております。

引き続き資料を探していますので、お心当たりのある方は 歴史民俗資料室までお知らせください。



構口(育易引 思います。 番が置かれていたのだと して、 り禁止となりますので、 宿場は通常、夜間は出入 張り出しが見られます。 分に向けて土塀のような 道の左右から道の中央部 おそらくこの土塀を利用 宿場の中を通り抜ける 門が設置され、 また、西側の 夜間でも人を が置かれ、 東西に され、 ですが、 側の水路に4個所の「水 や万一の火災に備えるた 宿場町では必ず生活用水 も青色で描かれています。 の小さな水路の書き込み現在でも見られる南北 めに設けられているもの のみが記述されています。

制札所とは、 夜燈 の入口には、 ています。